園長だより「家庭教育の大切さ」　第２６号

もう60年近く前の話になりますが、私が子どもの頃は学校での教育だけでなく、家庭での教育が充実していたように思います。そろばんや習字の教室に通っていた子どもはいましたが、小学生で学習塾（私が子どもの頃は勉強学校と呼んでいました）に通う子どもはほとんどいませんでした。時代が違うと言ってしまえばそれまでなのですが・・・。

生まれて今日まで幼稚園・学校以外で習い事というものをしたことが無い私の場合、学校から帰ってくると先ず大急ぎで宿題をしました。宿題を仕上げた後は、母が新聞に挟まれていたチラシの裏に書いてくれた計算問題と漢字の書き取りをしてから（今、考えると母は私が学校でどんな学習をしているかを把握していたということですね。おそらく、私が眠ってしまった後にランドセルを開け、教科書やノートを見てくれていたんだと思います。）、それを終えると阪神タイガースの帽子をかぶって、外に飛び出していくというのが日常でした。まさに昭和の子どもですね。ただ、これは私だけが特別に頑張っていたというわけではありません。時間や方法は違っても宿題以外に家庭で自主学習をしている子どもが多くいました。

学習であれ、しつけであれ、子ども達が成長していく上で家庭の果たす役割は大きなものがあります。時代背景が変わったとしても、今も家庭・地域・学校の総がかりで子ども達を育てていくことが大切だということに違いはありません。

18世紀の思想家Ｊ・Ｊ・ルソーは「世界で一番有能な先生によってよりも、分別ある平凡な親の手によってこそ子どもは立派に教育される。才能が熱意に代わる以上に熱意は才能に代わることができるはずだ」と著書「エミール」の中で述べています。自由でありながらわがままでない、不精でない、暴君でない、強情でない、我慢強い子どもを育てるためにはどうすれば良いのでしょうか。Ｊ・Ｊ・ルソーの説く家庭教育の４つの原則を紹介したいと思います。

- 子どもの力でやれない点だけは助けてやらなければいけない。
- 子どもへの援助は客観的に見て必要なものに限定しなければいけない。
- 子どもの欲求や要求が自然なものか、わがままや気まぐれから出てきたものかを正確に見分けられるように子どもの態度や言葉をよく研究しなければならない。
- 持っている力は全部、存分に発揮させよ。

18世紀に書かれたこの原則は今の時代も家庭教育の原則として立派に通用するのではないかと思います。子ども達に学習習慣や基本的な生活習慣やしつけ・マナーなどを身に付けさせるためには、家庭教育と学校教育（幼稚園・保育園を含めて）が両輪としてスムーズに回転し続けること。つまり、お互いにいつもお子さんをど真ん中において考えることが大切です。そうすることが子ども達を大きく、しっかりと成長させることになると考えています。どうかこれからも変わらず城東ちどり保育園の保育・教育にご理解ご協力を頂きますようにお願い申し上げます。